

物が繁殖して水路をせばめてしまっている。以上のような理由で河川における魚類の生息環境はあまり良好とはいえず、絶滅したか又は絶滅に瀕している種類が多々ある。

灌漑用の溜池は元来、水田に水のいらなくなった晩秋には一度水を抜き、翌春また水を溜めたものである。水抜きは溜まった水を新しい水と入れ替えるという効果だけでなく、一年間に溜まった堆積物を排出するなどの効果があった。人々は水抜きをした際に出てくるコイ、フナ、ウナギ、ハゼ、エビ、シジミなどの魚介類を採って食べたものである。しかし、現在多くの池で水抜きが行われなくなってきた。そのため流入した堆積物や池に生えた水草などが夏に分解して水質が悪化し、魚介類がすめない状態になった池もある。

表1—8に町内にすむ主な魚類をあげ、魚に詳しい人々の話を参考にして過去からの増減の度合を考察した。

最近の傾向として川や溜池で外来魚のオオクチバス（ブラックバス又は単にバスと呼んでいる）とブルー・ギルが急増していることがあげられる。ブラックバスは町内のすべての溜池にいるといっても過言ではない。これらの種類はコイやフナなどの卵や稚魚を食べるので従来の川や池の生態系をこわす種類として問題になっている。

長峽川の上流部の長川橋付近や浦河内橋上流部などでは諫山小学校や第三保育所などの環境教育の一環としてコイの稚魚の

放流が行われている。

〔付、甲殻類について〕

河川や溜池に生息する甲殻類には次のような種類がある。

ヨコエビ類のニッポンヨコエビ、エビ類としてヌマエビ、ミナミヌカエビ、テナガエビ、スジエビ、アメリカザリガニ、カニ類としてサワガニ、モクズガニ。

エビ類は農薬の影響を極端に受けた動物であり、一時期河川からは姿を消していた。しかし、近年少数ではあるが見られるようになってきている。アメリカザリガニはウシガエルの餌として輸入されたものが逃げ出して繁殖したといわれている。基盤整備によって湿地や水田地帯からは姿を消したが、山間部の溜池には今なおかなりの数が生息している。

三 無脊椎動物

1 昆虫類の概説

無脊椎動物については、昆虫類のみを取り上げることにしたが、昆虫類に関してもこれまで町内で調査が行われたことはないので、どれだけの種類が生息しているかは不明である。そのため、ここでは全県的な資料に基づいて馴染みの深いチョウ類、トンボ類、セミ類、ホタルについてのみ取り上げることにした。

県内ではチョウ類約一〇〇種、ガ類約二二〇〇種、コウチュ

ウ類は三〇二七種、トンボ類八九種などが確認されている。周辺部の平尾台や香春町などで確認され、本町にも生息すると考えられる昆虫類のうち「福岡県レッドデータブック二〇〇一」に希少種として取り上げられている種類のうち、チョウ目では絶滅危惧Ⅱ類としてヤマチャバナセセリ、エゾスジグロシロチョウ、ミズイロオナガシジミ、アカシジミ、ウラギンヒヨウモン、ウラギンスジヒヨウモン、クモガタヒヨウモン、ジャノメチョウ、ウラナミジャノメ、オオミノガ、準絶滅危惧としてオオチャバナセセリがある。その他の仲間では絶滅危惧Ⅱ類としてコウチュウ類のクスベニカミキリ、ミドリカミキリ、トラフカミキリ、ヒメビロウドカミキリ、アサカミキリ、情報不足としてヒコサンオオズナガゴミムシやオオアオホソゴミムシがあり、また、準絶滅危惧としてトンボ目のムカシトンボやカメムシ目のハルゼミ、タガメ、ミズカマキリ、コオイムシなどがあげられる。

勝山町には深い山こそないが山地、平野部の古墳や神社の森、草地、水田、畑地、河川、溜池など自然は豊かで変化に富んでいるために多様な昆虫が生息していると思われる。特にトンボ類にとっては山間部に生息に適した溜池が多数散在しているために種類、個体数ともに豊富である。

2 チョウ類

生息していると思われる種類は約八〇種で英彦山地を除く田



写真1—48 イシガケチョウ (竜ヶ鼻台)

川地域や豊前・京築地域の低山地から平野部に生息する種類がみられると思つてよい。

特徴のある種類を挙げると、ジャコウアゲハはアゲハチョウの仲間でおスは黒、メスは茶色の翅を持つが、オスがジャコウ臭を出してメスを誘うといわれ、香春町の金辺川沿いに出現する。本土では最も美しい種類

とされているヤマカラスアゲハが香春岳で、国蝶になつているオオムラサキが採銅所で採集されたことがある。エゾスジグロシロチョウはモンシロチョウの仲間で幼虫がアブラナ科のスズシロソウを食べて育つ。スズシロソウは石灰岩上に生育する特別な植物であるために分布が香春岳や平尾台などに限られる。勝山町ではスズシロソウは竜ヶ鼻や上河内に見られることからこの蝶の出現が十分考えられる。イシガケチョウは熱帯系の種類で、これまでに英彦山、福智山、香春岳で確認されている。今回の調査でこれが竜ヶ鼻台に生息していることが明らかになった。

写真で示したヤママユガは体の大きな蛾で、開張は一〜一三センチ。貴重な蛾で、幼虫はクヌギ、コナラ、クリなどの葉を食

表1—9 チョウ類

<p>アゲハチョウ科</p>	<p>*ジャコウアゲハ ○アオスジアゲハ ○アゲハ ○キアゲハ ○クロアゲハ ○ナガサキアゲハ オナガアゲハ ○モンキアゲハ カラスアゲハ *ミヤマカラスアゲハ</p>	<p>シジミチョウ科</p>	<p>オオウラギンヒョウモン オオウラギンスジヒョウモン *クモガタヒョウモン ○ツマグロヒョウモン *ミズイロオナガシジミ *アカシジミ ○ウラギンシジミ キリシマミドリシジミ ミヤマカラスシジミ コツバメ トラフシジミ</p>
<p>シロチョウ科</p>	<p>○キチョウ ○ツマグロキチョウ ○ツマキチョウ ○モンキチョウ *エゾスジグロシロチョウ スジグロシロチョウ ○モンシロチョウ</p>	<p>セセリチョウ科</p>	<p>○ムラサキシジミ ムラサキツバメ ゴイシシジミ ○ベニシジミ ○ヤマトシジミ ○ウラナミシジミ シルビキシジミ</p>
<p>マダラチョウ科 ジャノメチョウ科</p>	<p>アサギマダラ ○ヒメウラナミジャノメ *ウラナミジャノメ ヒメジャノメ コジャノメ *ジャノメチョウ クロヒカゲ ヒメキマダラヒカゲ ○サトキマダラヒカゲ ヤマキマダラヒカゲ クロコノマチョウ キマダラモドキ ウスイロコノマチョウ</p>	<p>○ルリシジミ サツマシジミ ○ツバメシジミ ウラギンシジミ クロシジミ タイワンツバメシジミ スギタニルリシジミ ミヤマセセリ ダイミョウセセリ アオバセセリ キバネセセリ ホソバセセリ</p>	<p>○ヒメキマダラセセリ キマダラセセリ ○コチャバネセセリ オオチャバネセセリ チャバネセセリ *ミヤマチャバネセセリ ○イチモンジセセリ クロセセリ</p>
<p>タテハチョウ科</p>	<p>*オオムラサキ コムラサキ ゴマダラチョウ スミナガシ *イシガケチョウ ○イチモンジチョウ ○コムスジ ○キタテハ ○アカタテハ ヒメアカタテハ ヒオドシチョウ ○ルリタテハ *ウラギンヒョウモン *ウラギンスジヒョウモン ミドリヒョウモン メスグロヒョウモン</p>		

○：身近でよく見られる種類

*：希少種

県内で確認されている八九種のうち七〇種あまりが生息していると思われる。トンボは幼虫であるヤゴの形態や餌の關係で種類により好む環境が異なり、溪流、ヨシやマコモなどの生える河川や溜池、川の流れの速い場所、ゆるやかな場所、水田や湿地などとそれぞれにすみわけがみられる。

3 トンボ類

べて成長し、蛹になる前にカイコガのように糸を出してうす緑色のまゆを作る。昔からこのまゆをつむいで織物とし、それはヤママユ織りとよばれ珍重されてきた。まゆは久保の明神の森で採取したが、本町にはコナラの木がたくさんあるのでかなりの数が生息しているものと思われる。まゆの大きさは長さ五・二^{センチ}、直径二・六^{センチ}であった。



写真1—49 ヤママユガ



写真1—50 まゆ（明神の森）

唱歌に出てくるアカトンボはアキアカネという種類であるが本州と違って九州では群れて飛ぶことはせず、山地で少数見られるだけである。勝山町などの平地に多いアカトンボはマユタテアカネという別の種類である。また、盆のころに水田の上や家の庭先などを群飛するボントンボとよばれる種類はウスバキトンボでアキアカネとは全く関係がない。この種類は飛翔力



写真1—51 ミヤマアカネのオス（長迫池）

勝山町にはトンボの生息に適したさまざまな環境がそろっているのでトンボにとっては楽園である。また、トンボのたくさんいる地域は自然環境の豊かな所である。調査でトンボ類が最も多かったのは長川の長迫池であった。長迫池の奥地には広範囲にヨシやイグサなどの生える水深の浅い湿地帯があつてアオイトトンボ、シヨウジヨウトンボ、ミヤマアカネ、シオカラトンボ、チヨウトンボなどたくさん種類が見られた。チヨウトンボは体の大きさに比して翅が大きく、黒色でチヨウウのように飛びまわるので目立つ。ミヤマアカネは比較的まれなトンボで体は赤く翅の先の方に茶色の模様をもつ。

が非常に強く、はるか南方より毎年北上して日本に達し、各地の池に産卵して新しく生まれた成虫が更に北上していくものであるが、結局死に絶えて我が国には定着することはないといわれる。体の赤いいわゆるアカトンボとしてマユタテアカネ、ミヤマアカネ、シヨウジョウトンボ、アキアカネ、ナツアカネなど数種が生息している。

4 セミ類

セミ類はカメムシの仲間で、口は注射針のようにとがっていて木や草のしるを吸うのに都合のよい形になっている。生息している種類はハルゼミ、ヒメハルゼミ、クマゼミ、アブラゼミ、ニイニイゼミ、ミンミンゼミ、ヒグラシ、ツクツクホウシの八種である。

ハルゼミは五月ごろにセミの中で最も早く現れ、マツ林の中で鳴くことが多い。近年マツ林が衰退するにつれてこのセミも減少しており、福岡県では絶滅危惧種に指定されている。ヒメハルゼミは少数で六月ごろ神社林などのシイ林で鳴く。身近なセミで最も早く鳴きはじめるのはニイニイゼミ、暑い季節になるとアブラゼミ、真夏の日中に鳴くのがクマゼミである。ミンミンゼミは山沿いの地域に多い。朝夕にツクツクホウシやヒグラシの声が聞かれるようになると秋が近い。

5 ホタル類

長峡川の上流域の岩熊、矢山、米山、上矢山、下河内、上河

内地域はホタルの里である。ホタルの仲間は十数種いると思われるが、そのうち光を発するのはゲンジボタルとヘイケボタルの二種類だけである。ゲンジボタルは幼虫が清流にすむカワナを食べて成長し、五月下旬ごろに成虫が川辺に群舞するのに対し、ヘイケボタルは八月ごろ水田で発生するもので、体は小さく、ごく少数で、しかも群れて飛ぶことのないホタルである。したがってホタル見の対象となっているものはすべてゲンジボタルである。ゲンジボタル一匹が成虫になるまでにはカワナは三〇匹必要といわれる。

ホタルの調査は、その最盛期と思われる平成十五年五月二十七日の日暮れから午後十時までの間に行った。

長峡川の本流では長川橋より下流では見られず、長川橋と上流の松ノ木橋の間に一匹、ちらほら見えはじめたのは柿手橋付近からで諫山小学校に近い検手橋付近からは更に増えた。最も多かったのは浦河内橋より約三〇〇坪上流の広谷川との合流点



写真1—52 浦河内の里・清の上流の橋内ホタル

付近で一〇〇〇匹を超える大群の乱舞は壮観であった。ここへは浦河内橋から川沿いに小道があるので、車は橋の手前の広

場に置いて歩けばよい。邪魔になる外灯もなく、ゆっくりその競演を楽しむことができる。ここからは上流の宇土橋付近でもかなりの数を見ることができたが、道路から川が離れるので観察には適さない。

矢山川は長峡川の支流で松ノ木橋の上方で本流に合流している。ホタルは新古江橋より上流より現れたが、その数はあまり多くなく、樋口橋、矢山の前田橋付近、米山地区も同様であった。しかし、上矢山の明神橋付近から更に上流の矢山橋の間では増加した。矢山橋から上流にも多く発生するが、山地で気温や水温が低いために一週間程度遅れる。

ホタルの発生数は浦河内地区、矢山地区とも一定しておらず、年によりかなり変動があるそうである。なお、平成十三年は浦河内地区では少なく、矢山地区では多かったと聞く。いずれの地もホタルの里と呼ぶにふさわしい数が生息していたが、見物の人は少なく、まだ広く知られてはいないようである。

第三節 自然環境の保全

山地に関して自然が豊富であるという場合、そこにはすぐれた自然がなくてはならない。自然林の中には多くの種類の樹木が茂り、林床にもたくさんの草本が生育している。蝶や蛾などの草食性の昆虫類の幼虫はそれぞれの種類によって食べる植物

がきまっているので植物の種類が多ければ多いほど昆虫も豊富になり、それを食べる小鳥なども多くなる。一方、造林地ではスギやヒノキを好む動物はほとんどなく、管理の行き届いていない林の中は暗く、ほかの植物はほとんど生育していない。そのため造林地は動物にとって好ましい環境にはなり得ない。勝山町の山地では自然林の占める割合は比較的高いものの樹木のまだ若い部分がほとんどなので今後はできるだけこのままにして森林を育てていかななくてはならない。自然林としては仲哀トンネルのある付近のシイ林が最もすぐれており、東部山地のタムシバ群落も特異な林で、保護していかねばならない。一方、平尾台にかかる部分では石灰岩の採掘によって貴重な石灰岩地植生の一部がすでに消滅している。

町内には障子ヶ岳の山頂部をはじめ溜池の土手などに草地がある。草地は人が草刈りや野焼きをすることではじめて維持される植生であり、管理を怠るとすぐに樹木に覆われてしまう。古くからの草地にはキキョウ、リンドウ、オミナエシ、ヒヨドリバナ、カワラナデシコなどの草花があるものであるが、そのような個所はほとんど残されていない。しかし、エゾミソハギ、ミソナオシ、タヌキマメのような希少な植物の生える所もある。自然を回復させる努力をしなければならぬ。

河川ではこれまで水害ばかりを考えた改修がなされ、そこにすむ魚類、甲殻類、水生昆虫などの動物に関しては全く配慮さ